

Title	石川県史蹟名勝調査報告第二輯, 石川県編
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.4 (1924. 11) ,p.154(624)- 155(625)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19241100-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

い形であることが知られる。」と云つて其使用の年代を指示しておられる等は一々首肯する事が出来よう。又(は)萬葉集時代に於ける神人の交通」に收められてゐる(十)いのる、まこひのむ。この區別については「いのるまこひ語はまた神に祈るまこひ後世の表現とは反對の、神をいのるまこひ形で始まつた。(中略)いのるまこひ語の内容は(中略)神を祭つてわが願ふが如くなることを期するまこひの意外に把促し得る所は無いであらう。(中略)まこひのむ。の心も亦、神を祭りてわが願ふが如くに有り得ようまこひに在る。」まこひ其結論として「從來の學者のなしてゐる如くに禱をものむと讀むまこひが不都合でないであらう。」と云はれて舊來の説を認容し、敢て新を建てようまこひならぬ所に著者の穩健な研究の態度と天賦の性格とが反映してゐるように思はれる。又、いのるまこひのむ。の續きに、記されてゐる(十一)ちはやぶる。まこひ、たまちはやぶ。の詞についてはちはやぶるが「神の特性のうち、その恐るべき暴き方面を意味してゐるもので、それが普通に神の枕詞として用ひられてゐるのは人の心に神の特性のうち、この方面が特に注意せられてゐたことを示すものである」に對して玉ちはやぶ。は「玉は靈魂生命等の意味の語と思はれる。(中略)神の善意的なる威力を語るものである。」から要するに「ちはやぶるが神の荒き發動を意味するに對して靈ちはやぶるのなごやかなる心持であるまこひを見られるのである。」と斷言せられてゐるのは一點の批評さへ許さないような議論である。

是を通貫するに著者の言語に對する解釋は一々用語例の下に其

明敏な考察と判斷を下しておられる上に、文學的憧憬れよりして、よく上代人に自らがりすまじしての研究であるから量からいへば決して大冊子ではない。が然し、價値に至つては、出まかせに書く大部な近來の出版物を壓倒してゐるような氣がして、決して、美女を左に、紅酒を右にしたる饗宴の寸時の厚くるまこひまこひに濃艶な世界にある櫻花ではなくて、晚鐘ひびきて暮煙たなびひ、俗人既に散じたる後の興趣と涙ぐましいまでの崇高まこひに充たされた永遠性の櫻花なのである。或は又、夜更けて鳴く虫にあはれを添ふる月影に照された萩の花なのである。

(大正十三九廿四脱稿。曾根研三)

石川縣史蹟名勝調査報告第二輯(石川縣編)

本書は石川縣に於ける主要なる社寺の舊跡・古城址及び殖産遺跡の調査報告にして、既刊第一輯(石器、古墳)に接續するものである。收むる處のものは

- (一) 國分寺及び總社遺跡、(二) 礎石及び古瓦、(三) 白山關係遺跡(四) 石動山舊跡(五) 俱利伽羅古戰場、(六) 總持寺舊跡(七) 利生塔婆舊址、(八) 大聖寺城址、(九) 穴水城址、(十) 木尾嶽城址、(十一) 七尾城址、(十二) 小松附近の城址、(十三) 鳥越城址、(十四) 超勝寺舊跡(十五) 鑄物師舊跡、(十六) 末森城址(十七) 淺井曠古戰場(十八) 九谷窯址、附録石立及び石佛

なほ口繪金澤城址の外圖版、挿入圖、實測圖數十種は何れも鮮明で本文の説明を補足する處が多い。

最後にかく有益の書を寄贈せられたる石川縣に深謝し且本調査に努力せられたる同縣囑托上田三平氏に深甚の敬意を表するものである。
(大正十三、九、六 武田勝藏)

神戸市史本編(神戸市各説(役所編))

本書は曩に上梓せられた神戸市史本編總説と相俟ちて、同市史の樞軸を成せるものである。總説に於ては専ら時代を分つて沿革を概観し、各説に於ては各項目に互りて市の發達を細叙せしものである。本書は左の十五章を收めて居る。

- (一) 産業の發達及び富の蓄積、(二) 生活狀態の變遷、(三) 人口の増殖、(四) 市の膨脹及び充實、(五) 市政機關の沿革、(六) 市營事業、(七) 市の財政、(八) 衛生、(九) 土木、(一〇) 勸業、(一一) 救恤、(一二) 教育、(一三) 外事、(一四) 兵事警察並に消防、(一五) 行幸啓式典並に褒賞

右の各章は何れも明治初年より記述して最近に至り、其章末毎に引用書目を附記し文章も亦甚だ簡明である。同市史の全部完成の上は大阪市史、名古屋市史等と共に市史の模範たるべきものと思ふ。
(大正十一、九、一 武田勝藏)

土居通夫君傳(半井桃水編)

本書は關西實業界の重鎮故土居通夫君の行實である。(菊版約九百頁) 始め大阪朝日新聞記者故須藤翠南氏が故翁の令嗣剛吉郎君

の依頼により起稿したる處、業半ならずして同氏は物故せられたので、翠南氏の親友にして前同新聞記者半井桃水氏これが續稿を引受られ遂に完結を見るに至つたものである。

翁の閱歴は知る人多く、今更改めて記す要も無いが、未知の人の御參考迄に、左に其の概要を摘録する。

翁は諱を通夫、號を無腸、通稱を彦六と云ひ、天保八年四月廿一日伊豫國宇和島藩士大塚南平祐紀の六男として生れ、幼名を万之助と呼ぶ。始め松村彦兵衛清武に養はる、所となり、名を保太郎と改めたが、後、出で、土居氏を冒すに至つた。翁は先づ漢學を修め、尋いで蘭學に及びたるも、中途にしてこれを廢した。當時は開國鎖國の兩論紛糾の秋であつたので、翁は至誠奉國の志を立て、遂に脱藩し姓を變じて、京阪の間に往復し、勤王の諸士と交を結び、大いに國事に奔走する處があつた。明治中興となるに及んでは外國事務局、司法省に歴任し、明治十七年自ら思ふ所あつて致仕し、爾來身を浪華の實業界に投じ、一意衷心拮据經營して其發展に努め、明治廿七年には選ばれて代議士となり、又其翌廿八年には押されて大阪商業會議所會頭となり、爾來其職にある事二十有二年、實に關西實業界の元勳である。明治三十三年歐米各國を巡遊して、其の商工事業を視察し、其後四十二年再度米國に赴き、又翌年支那を訪づる、等の事があつた。時に翁年七十を超ゆる事五歳、衆皆な其の壯を稱せぬものは無かつたといふ。大正四年即位大典の節は全國功勞者中より選拔せられ特に叙勳の恩命に浴し、益々我が實業界に盡瘁する所があつた。六年九月九